



月刊 第 575 号

観音講と短歌会と

「雨が観音講を待っている」
そんな言い慣らわしのある梅雨
の季節の御佛事である。観音堂
から新道をはさんで六地藏の並
ぶ下町まで明りが灯され、短夜
の季節仲々昏れない夕闇がよう

やく迫りはじめると参道を上る
人影が増えはじめる。
朝からお勤めが幾度も勤修さ
れるのだが、観音講の雰囲気は
宵闇が盛りあげてくれるようだ。
昔に比べると少し淋しい人出



六月の海は一年中で一番穏やかである。歌人はこんな夕
日を眺めて心の中にどんな思いを蓄えるのであろうか。
そしてどんな言葉でその思いを紡ぐのであろうか。



木々の間から少しづつ昏りが広がりはじめる。昼から夜
への移行は光だけでなく音や感触を通して変化してゆ
く。見えない世界が動き出す。



馬場あき子さんの歯ぎれのよい論評に耳を傾ける聴衆。
自分の歌の番が近づくと緊張が高まり、まさに勝負の世界。

ではあるが上下から家族づれで
お参りする人の列がつづく。
一年中で一番風の停っている
季節、闇の重さこそ感じられる。
そんな静かな闇の中をチンチ
ンと鐘の音が流れ読経の音が流
れる。
随分遠方からの講の人達のお
参りもあり、村部からのお参り
の人達も加わりお籠りの一夜を
過ごされる人も沢山おられたと
聞か、今はそのような人は全
く居られないとのこと。

少しづつ様子の変わってゆく中
で観音堂石段脇の不動明王は昔
のままの立姿で、お参りの方々
の掛けて下さる水に濡れて、悪
い所をさすると病が治るとの言
い伝えて、いつでもどなたでも
なでられるままに「在し給う」。
幸い十六日から十八日までの
期間中全く雨の心配のいらない
今年の観音講であった。
期を一にして新潟日報歌壇の
選者である馬場あき子さんを迎
えての短歌会が開催された。
馬場さんは日報歌壇選者にな
られてもう二十九年、しかも朝
日新聞歌壇の選者でもあられて
地名度は全国区。

地方の町の観光協会が文芸
系のイベントを主催すると言う
のも珍らしいことだが、一昨年
は短歌の中原道夫さん、昨年
は短歌の宮英子さんと今年で三
回目となり応募短歌は一三七首
と主催側の予想をはるかに越え
て而も選評を聞きたいと言う照
会も多く予定していた会場を急
遽変更、当日会場となった文化
会館へは三百人が詰めかけ、今
年七十六歳の馬場女史応募一三
七首を一首残らず選評添削、辛
口の選者ですと自己紹介の通り
パッタパッタと快刀乱麻歯切れ
のよい切口で四時間近い論評は
実に面目躍如。参加者も関東方
面を中心に県外から三十数名を
はじめ町外から一四〇名と大盛
況。夕日に合わせての懇親会へ
も百二十名が参加、馬場さんの
要望で夕日が沈むまでゆっくり
と部屋から眺めたいとのこと
で開宴を三十分余り延ばしてま
さに夕日の宴となった。恐らく寺
泊の夕日の歌が何首か生まれる
ことを期待することしきり。



海洋深層水を使った風呂が人気を呼んでいる。左手の建物が浴場。右手に順動丸のシャブトが見える。水族館前からの風景。



風呂の中から日本海が眺望できる。湯に浸り目を閉じると、岩にぶつかる波の音がどうと聞こえる。海との一体感。



かつてこのコンクリートは波たたきであった。今海岸線は右手400メートル先となった。朝の爽やかな空気の中、絶好のウォーキングコース。

◇馬場あき子賞
当日の特選歌は次の通り。
あけはなつ窓より潮の香のみ
ちて涅槃像浮くがに春の佐渡
みゆ 新潟市 大橋 智津

◇新潟日報賞
柏餅買ひて五月の貌となり歩
きたすときかぐはしき風
東京都 増田 啓子

◇寺泊町長賞
流れ藻の浮かぶ水面もりあが
りはた沈みして海は呼吸す
長岡市 田宮 朋子

翌日は先生を囲んで町の史跡
を廻り乍らの歌会がこれ又素晴
しい初夏の海風の中で行われ心
を悠久の歴史の中に遊ばせて有
意義な一日。企画運営スタッフ
一同に深く感謝。御苦勞さま。

癒しの場

さとうのぶひと

例年より一週間ほど早く梅雨
に入りました。相変わらず草茫
々の庭は、春の草が終わり、夏
草が芽吹いています。枯れた春
の草を刈り取ると、黒々した土
の中に無数の生き物がうごめい
ています。青々と茂ったクロー
パーの下には、何匹もミミズが
這っています。小さな虫たちと
植物が、生命を交換し合ってい
る姿を眺めているのは楽しいも
のです。

そんなわけで、筆者の草取り
はなかなか捗りません。
畑をやっていると土の栄養分
は作物に収奪されます。藪田の
団地で有機農業をやっていた金
切先生は、作物は土を減らす、
とよく言っていました。何もし
ないで放っておけば、植物が太
陽の光をため込み、土はどんど
ん豊かになって、土の収支決算
は絶えず黒字のはずです。

さて、海洋深層水の大浴場が
寺泊に完成してから二カ月、な
かなかの評判を呼んでいます。
大の風呂好きである筆者は、温
泉場に一人で出かけ、終日ぬる
い露天風呂に浸かることを無上
の喜びとしています。誌友諸兄
の中にも同じ考えの方が大勢お
られるのではないのでしょうか。
子どもの頃、寺泊には銭湯が
いくつもありませんでした。漢字が分
らないので平仮名表記させてい
ただくと、上荒町の「ごへえ」
さん、「げんたろう」さん、大
町の「だいざぶろう」さん、に
は厄介になったものです。

東京23区の中に温泉が出るな
ど、最初は信じられませんでした。
数カ月前、それを確かめる
機会に恵まれました。世田谷区
瀬田、渋谷から田園都市線二子
玉川駅に近く、環状八号線と
二四六号線の交差するあたりに
それはありました。地名を取っ
て「瀬田温泉」と言います。
茶褐色の湯は泉質良好、実に
よく温まります。かけ流しでど
んどん湧いています。その上、マッ
スポーツ施設や温水プール、マッ
サージ室なども備わってしまし
た。

バブル経済真っ盛りの頃、こ
の「瀬田温泉」のような、大浴
場を核とした総合レジャー施設
があちこちに開発されました。



町民運動会は六月の町をあげての行事。かつての盛り上りはないが各町内団結の時である。夜の部の慰労会も町内懇親の場。



今年は第二区が宣誓の当番。若夫婦が心合わせて宣誓。昔は一区がダントツだったが、最近では三区が優勝する。何故ナンド。



海岸に草木が育つには仲々環境条件が厳しく、手をかけても仲々育たない。それでも少しづつ根付きはじめ、桃花ツキミソウ、ネジリバナなども群生。写真は立派に育成し花をもったトペラ。

以来、浴場ブーム、温泉ブームがここ十年ほど過熱しています。これは古くからある、いわゆる温泉場や、銭湯のような町のお風呂屋さんとは区別されるべきでしょう。

「極楽」あるいは「桃源郷」と呼ばれるところ。われわれ庶民は、日常生活のくびきから逃れ、精神的にも物質的にも満ち足りた、理想的な場所を夢見ています。力尽きるまで走り続けることは不可能です。時には「ゆっくり休みたい」「癒されたい」と願うものです。大浴場は、この世の極楽を体現し、庶民の欲望を叶える手軽な場所と言えてしまおう。

地球上に存在する水のおよそ九七・五％が海水です。この海水のうち、あまり深くない部分の水を表層水といい、水深が二〇メートル以上の水を深層水と呼んでいます。この水は栄養価が高いこと。海の表面近くでは、太陽の光で生育した植物プランクトンが栄養分を摂取してしましますが、

水深二〇メートルから三〇〇メートルのところでは太陽光線が届かず、栄養分やミネラルが消費されることがありません。さらに、海洋深層水は清浄で雑菌がほとんどありません。一年を通して、水温が低い状態で安定し、たとえば富山湾の場合、二度から三度です。また塩分濃度が高いことも知られています。現在、この海洋深層水は、ミネラル・ウォーターのほか化粧水など様々な用途に使われています。(中村靖彦「ウォーター・ビジネス」岩波新書、二〇〇四年)

府中市	松井 武正	金五千円
三条市	土田レノン	金三千円
岐阜市	福田 幸子	金五千円
東京都	山崎 ふみ	金三千円
入間市	吉田 守正	金三千円
新潟市	佐野 キク	金五千円
弥彦村	清水 啓資	金五千円
敦賀市	石崎 トミ	金五千円
栃木県	丸山 定芳	金五千円
千葉県	金沢 カズエ	金一万円
日野市	星 信也	金五千円
寺泊町	中村 アキノ	金五千円
長井	平石 勝	金五千円
大平	長井 美枝	金三千円
久住	大平 洋一	金三千円
佐野	久住 敏子	金五千円
河合	佐野 正治	金三千円
白川	河合 正治	金三千円
原田	白川 ノリ	金三千円

誌代御後援 (敬称略・順不同)
三島市 北沢 順治 金三千元

小波会六月旬会詠草

兼題 卯の花腐し・雨蛙他

赤石を

濡らし卯の花腐しかな

外山きよし

古き家の

卯の花腐し三和土かな

大越碧水子

村眠る

卯の花腐し昼も夜も

中村 流瓢

ガラス越し

掴みたい児と雨蛙

江原 汀子

葉がくれに

潜むごと棲む青蛙

斎藤 紫苑



旧寺泊中学校からの眺めは絶景である。
その名も汐見台。新道の家々と西埠頭水族館方面。
台風余波の海。

ひと声の

有心を聞けり雨蛙

小島 冬扇

ひとつ鳴き

ふたつ鳴き夜の雨蛙

外山 海子

樹下に座し

チベットの僧夏籠す

竹内 霍山

常温の

酒効いて来し冷奴

加勢 白汀

人は皆

天寿の願ひ初夏の海

能登 頑牛

無愛想な

あるじ顔出す初南瓜

小形 美代



中央埠頭と港内に台風をさけて船を強固に係留中の
漁船。
左手前は佐渡汽船駐車場。

み社の

明かし危ふし青嵐

小島 温石

山一つ

越へて清しき青田風

水沢 蕉子

萱草の

花のたましひ一日暮る

内藤 蓮子

あとがき

五月から六月と昔ながらの町の行事又新しい試みを加えての行事がつついて少し疲れ気味のところへ早々と梅雨入りの御宜託。ところが五月晴れと言いたような快晴がつついて何はともあれお天気は儲け物と洗濯は勿論のこと外掃除に怠仕事と疲

れもどこへやら。海辺は已に初夏を飛び越えて夏の装い。浜茶屋でも張り出しの簾茶屋の準備が始まった。
今年の五月はあまりぱっとした晴れやかな天気がなかった。この月は「五月晴れ」と「五月雨」と言い相対する気象用語を持っており、青葉若葉が陽に輝き、運動会、遠足の季節と言いつい込みが強く一年中で一番良い気候と鶴呑みにしているが、案外不安定な季節なのかも知れない。台風の接近で蒸し暑い日が二三日つづく中で、「最近漁の具合はどんがらネ」と尋ねて見ると、「ピチがあたけてどーもならんてばね、定置網もキス網も大くどきらてばね」とのこと。聞き慣れないピチとは水藻の一種



釣り帰りのクーラーボックスを覗いたら大きなソイが数匹いたので、持ってポーズをとって買った。
仲々の大物。

で六月下旬から七月にかけて切れて流れ出しこれが網にかかると網目をふさいで漁にならない困り物。
町長選も終り高橋誠氏が大差で五選を果たした。目下の課題は町村合併。行方や如何に。

毎月二十日発行

寺泊ふるさとだより

誌代税共(百円)

編集人 中 村 興 樹

発行人 新 潟 県 寺 泊 町

発行所 新 潟 県 寺 泊 町

ふるさとだより

郵便番号 九四〇―二五〇二

ダイヤル局番 〇二五八七五

電話 二〇二九番

振替番号 〇〇六二〇三三七四五

印刷所 吉野印刷株式会社